



『つくば21C教育フォーラム』を読みませんか？

筑波学院大学21世紀型教育研究所は、研究所報『つくば21C教育フォーラム』を季刊で発行しています。本学をはじめ高校での先端的な教育への取り組みをご紹介します、教育関係者の皆様のご参考にしていただけるよう、茨城県内だけではなく県外の高校にもお送りしています。

高校関係者の方々と、送付をご希望の方には対応させていただきます。本学入試グループ(nyushi@tsukuba-g.ac.jp)までご連絡ください。

ILA センター主催イベント イングリッシュサマーキャンプのご紹介



ENGLISH SUMMER CAMP 2021 SCHEDULE

1st 7.30 (FRI) - 8.1 (SUN) / 2nd 8.13 (FRI) - 8.15 (SUN)

Don't miss either of the summer camp sessions at TGU in 2021! Enjoy using and learning English in a relaxed, casual environment with native speakers from a variety of countries. While taking dynamic, challenging lessons aimed at diversifying your foreign language skills, you will expand your societal frame of reference by discussing critical issues and problems of a global and global nature. Moreover, there will be activities to help you think and function entirely in English. Come abroad for three days this summer... without ever setting foot in an airport!

1 DAY ENGLISH CAMP 7.22(THU) 8.7(SAT) 8.21(SAT)

One-Day Summer Camp Program is designed to give you a taste of the university's intensive and skill-deepening ILA Program, with its diverse global staff and mind-broadening curriculum.

※オープンキャンパス内での開催となります。



応募方法

右記 QR コードより
お申し込みください。



遠方から参加する方へ

株式会社 JTB 連携

遠方からお越しの参加者には、
宿泊先もご用意しています。
ご希望の方には案内をお送り
しますので、入試グループまで
お問い合わせください。

【入試広報グループ】

TEL.029-858-4815

FAX.029-858-7388

URL <https://www.tsukuba-g.ac.jp>

発行：筑波学院大学21世紀型教育研究所
発行日：2021年7月
住所：〒305-0031 茨城県つくば市吾妻3丁目1番地
電話：029-858-4811(代表)



つくば21C教育フォーラム

筑波学院大学21世紀型教育研究所報 第2号

「4年間の国内留学」しませんか？

ILAセンター長

ジュペ・ロバート(Robert Juppe)

ILA教員紹介

ILAコース学生インタビュー

あなたはここで何を学ぶ？

聞き手：望月 義人 筑波学院大学 学長

授業研究会報告

速報

大西 泰斗 先生 特別講演会

『話せる英語をどう学ぶのか』



 **筑波学院大学**
TSUKUBA GAKUIN UNIVERSITY



小さく生まれて大きく育つ

— ILA コースの発足に寄せて —

筑波学院大学学長・望月 義人

筑波学院大学は2021年4月、国際教養（International Liberal Arts）コース＝ILAコース＝を新たに設けました。語学授業の英語科目ではなく、英語だけを使ったさまざまな科目（英語イメージジョン）の授業を展開することを始めました。学生は4年間で約1万時間を超える英語学習を続けることにより、卒業時には、英語力の指標である実用英語技能検定（英検）1級を超える英語力を身につけてもらうのが、主な狙いです。

これにより、学生が将来、世界を舞台に活躍する力を養うだけでなく、地域社会の国際化をけん引できる人材へと成長することを目指しています。

しかし、ILAコース創設の目的は、単に「英語ができる人材」の輩出だけではありません。

インターネットで検索すれば、容易に解が見つかる時代です。英語も自動翻訳機があれば、英語から日本語、逆方向の日本語から英語へと変換してくれる簡単な会話には、これで十分という人もいるでしょう。

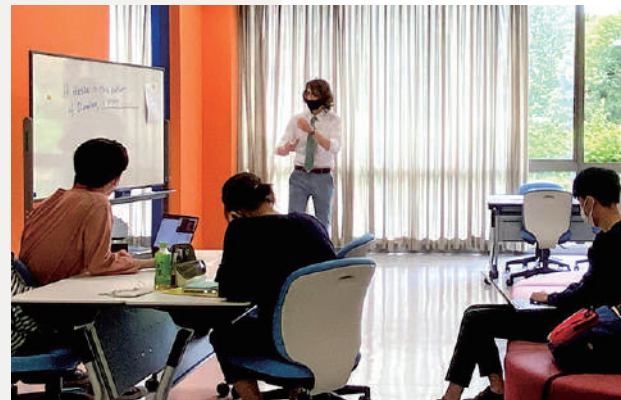
英会話学校やネットで海外の外国人から英語レッスンを受ける「オンライン留学」も、英語習得には有効であることは否定できません。しかし、大学レベルの学修コンテンツを英語で学び、グローバル時代に活躍する社会人としての基礎になる教養と専門性を身につけることが、ますます重要性を帯びてくると思われます。

筑波学院大学のILAコースは少数精鋭の学生5人と、基本的には英語を母国語とするネイティブ教員によって構成しスタートしました。ネイティブ教員はILAコース創設に伴い、新たに6人を採用しました。情報、環境、哲学、日本文学など幅広い分野にまたがり、従来から在職している教員に加え、計7人となりました。

筑波学院大学はILAコース専用フロアとして、可動式のテーブル付きチェアを備えた教室、学生たちが自由に語らえる「ベル・コモンズ」、ネイティブ教員が控える教員室、セミナールームなどを新設しました。



小田桐助教の授業風景



タイラー助教の授業風景

授業科目表を見ると、「地球と資源」、「情報基礎」、「文化の考え方」「プレゼンテーションスキルズ」などの英語イメージジョン科目が並んでいます。

授業風景は、5人という少人数なこともあってか、教員との活発なやり取りが行われており、和やかな中にも熱意がこもった授業が展開されています。

ILAコースの学生への大きな特典として、筑波学院大学は「2年次全員海外留学プログラム」を用意しました。

世界トップレベルの名門校として知られる、米国のUniversity of California Davis(UC Davis)に春学期及び夏学期の計約5カ月間、留学してもらい、学費約100万円は大学が負担するという画期的なものです。

UC Davisは東京大学の小宮山宏・元総長、キリンビールの荒蒔康一郎・元社長・会長らが留学した名門校です。現役ではウーバーイーツ日本法人の代表を務める武藤友木子氏がいます。

UC Davisでの学びは、現地で学友と触れ合い、議論を通じて、さまざまな人が集い、いろいろな世界があることを、英語を通じて体感させてくれることでしょう。

帰国したら、大学への復学は円滑に進むように配慮されており、留学先での単位取得も卒業要件に認定されます。

2年生後半の帰国後は英検1級レベルの英語力が可能となり、3年次以降には国際ビジネスのレベルを目指します。

筑波学院大学のILAコースは大きな期待を集めて船出しました。学生は初年度5人でスタートしましたが、彼らの成長とともに世間の耳目を集め、今後は大学を象徴する「看板」としてメインストリームになることが期待されています。

「小さく生まれて大きく育つ」。そんな存在になるよう、筑波学院大学はILAコースに注力してまいります。ぜひとも、ご期待ください。

「4年間の国内留学」しませんか？

FORWARD TO THE PAST,
BACK TO THE FUTURE

— 過去を振り返り、未来を展望する —



ILAセンター長
ジュベ・ロバート教授 (Robert Juppe)

Introducing the New and Dynamic ILA Program at Tsukuba Gakuin University

In 2021, Tsukuba Gakuin University launched an innovative, bold initiative with the inauguration of its International Liberal Arts (ILA) Program. This seems to represent an important directional adjustment in education not only for this university, but for the nation as a whole.

Until recently, it had become *de rigueur* to cut back on or even eliminate liberal arts and humanities programs. They are frequently viewed as ineffective in broader curricula whose goals focus primarily on purported productivity and efficiency, supporting a neoliberal agenda that provides students with so-called “functional employment skills” that serve in actuality as a substitute for a diverse, well-rounded education, offering intellectually unchallenging careers often in the world of high tech or the public sector.

The ILA aims to cultivate the development of critical thinking and analytical skills in ILA students through its intense focus on both global language proficiency and an interactive style of teaching. In a practical sense, the program is dynamic in that employers are actually increasingly seeking out graduates with the ability to handle complex situations and solve them in a global/glocal context. Given the nature and scale of the problems humanity faces today, a return to the liberal arts and humanities has never been more urgently imperative. Tsukuba Gakuin University has risen to take up this challenge. To paraphrase a bicultural architectural and artistic titan of bygone days, Isamu Noguchi, “What is past is modern.” One could paraphrase Noguchi a bit further. “The past is the progressive.”

Enter Tsukuba Gakuin University’s ILA. Then, head abroad for four years without ever stepping inside an airport. Beyond graduation, a global/glocal future awaits your diverse and deep set of analytical, functional skills. Head forward to the past, then back to the future.

新たにダイナミックなILAコース導入

筑波学院大学は2021年、これまでにない大胆な一步を踏み出し、国際教養コース（ILA）を開設しました。この先進的プロジェクトは、本学はもちろん、国の教育指針に重要な軌道修正を加えるものと思われます。

最近まで、リベラルアーツや人文科学という分野は、縮小したり、さらには廃止したりすることが避けられない状況にありました。というのも、社会が求める生産性や効率に比重を置くカリキュラムが広く採用されており、その中で、リベラルアーツや人文科学は、「成果が期待できないもの」と判断されてしまうことが少なからずあったからです。この考えは、いわゆる「即戦力として働ける技術」を学生たちに身に付けさせることを優先課題とする「新自由主義」に沿うものです。また、ハイテク社会や公的機関では、多様性に富む全人教育は、知的変革を必要としない人材を生み出すものとして、不必要なものとなっています。

ILAコースの目的は、世界共通語（英語）の習得と相方向型教育を通じて、学生たちの批判的思考力と分析的能力を育て深めることです。ILAコースは、時流に適合し、雇用する人たちが強く求める学生、つまり、難解な課題に果敢に取り組み、グローバルな場で生じる諸問題を解決できる能力を備えた学生を育成します。人類がいま直面する諸問題の本質や範囲を考えると、これまで以上にリベラルアーツや人文科学へ回帰することが必要です。筑波学院大学は、この挑戦に立ち向い、行動を起こすことを決めました。日米2文化併存の環境で育ち、建築と芸術の巨人と称されるイサム・ノグチ（父が日本人、母が米国人）は、「過去は現代的である」と述べています。イサム・ノグチの言葉を借用し、さらに、ひとこと入れ替えるとすれば、「過去は進歩的である」となるでしょうか。

筑波学院大学のILAコースに参加してみませんか。そして、「4年間の国内留学」にチャレンジしてみませんか。卒業後、広くかつ洞察力のある実践的な分析力を身につけた、ボーダレス社会で活躍する自分の姿がそこにあるでしょう。過去に立ち返り、そして、未来に向かい羽ばたきましょう。

ILA教員紹介

ILAコースでは、英語を卓越した水準にまで高め、国際的視野を広げることで、世界で活躍できる人材の育成を目指します。そのために、英語の集中プログラムや英語で学ぶ専門科目や専門ゼミなど、「英語づくし」の環境が用意されています。
ここでは、その環境を支えるILAコースのネイティブ教員を紹介します。

ジュベ・ロバート Robert Juppe (教授)
主な授業：English for Tourism、Communication Strategies、ほか
出身：アメリカ
主な学歴：デンバー大学

授業の特色：英語の授業では、英語が苦手な学生でも抵抗なく学べるよう、様々なアクティビティーを取り入れながら、実用的な表現を中心に教えています。English for Tourismの授業では日本人学生をはじめさまざまな国籍の学生が積極的にコミュニケーションをとり、楽しく授業を進めています。

学生に期待すること：学生の皆さんには、さまざまな授業を受けて、自分の興味があることを見つけてほしいと思います。英語ばかりでなく他の外国語にも興味をもってほしいですね。そして、コロナ禍が収まったらぜひ海外旅行に行き、自分の語学力を試してみてください。



パンタ・ボーラ Bhola Panta (准教授)
主な授業：情報活用と危機管理、ネットワーク活用、ほか
出身：ネパール
主な学歴：東京理科大学／電気通信大学大学院

授業の特色：PCの基礎やビジネス文書の作成方法などについて学ぶ授業を担当していますが、基本的には英語で指導します。

学生に期待すること：現在、情報通信機器は、私たちにとってなくてはならないツールとなっています。学生たちにはそれを障害なく使える力、ITリテラシーをぜひ身につけてほしいと思います。そしてITリテラシーを武器に、自分の可能性を広げてほしいですね。



アンドリュー・タイラー Tyler Andrew (助教)
主な授業：EB Reading and Writing、Humanities、ほか
出身：アメリカ
主な学歴：ノース・ダコタ大学／ハーバード大学大学院

授業の特色：3、4年生を対象に、哲学の問題について英語で演習を行っています。ILAの学生も、上級生になったらぜひ受講してほしいと思います。

学生に期待すること：ILAの学生たちには、様々な問題を自分の問題として考えられる人間を目指してほしい。なぜそれが存在するのか、と常に自らに問い、深く考えられるようになってほしいと思います。

ウィーセンベルク・サンドロ Sandro Wiesenberg (助教)
主な授業：世界遺産、EAP Basic、ほか
出身：ドイツ
主な学歴：ベルリン自由大学／筑波大学大学院

授業の特色：3、4年生対象の演習の授業では、映画やアニメなどの字幕の翻訳を題材にしています。日本の文化が英語でどのように翻訳されるのか、アメリカの文化が日本語でどのように翻訳されるのか、ということを考えながら、自国や他国の文化に対する理解を深めます。

学生に期待すること：ILAの学生たちの英語能力は高いと思いますから、卒業後はぜひ国際的な仕事についてほしい。そのために、さまざまな国の文化や歴史に関する知識も身につけて、積極的にコミュニケーションができるようになってほしいと思います。



小田桐・ジェイク Jake Odagiri (助教)
主な授業：国際社会と文化、メディアと文化、ほか
出身：アメリカ
主な学歴：ユタ大学／大阪大学大学院

授業の特色：私の授業では、客観的にものを考える能力を身につけることを目指しています。例えばCMを題材に、誰が対象か、作り手の意図は何か、どんなイメージを作ろうとしているのか、といったことについて、対象と距離を置きながら検討します。

学生に期待すること：学生たちにはぜひ、当たり前のものが当たり前ではないことに気づき、新しいものの見方を身につけてほしいと思います。客観的、抽象的に物事を考えられるようになってくれるといいですね。

グロンウォルド・ナサニエル Nathaniel Gronewold (助教)
主な授業：地球と資源、LA Natural science、ほか
出身：アメリカ
主な学歴：ミネソタ大学／テキサスA&M大学大学院

授業の特色：ILAクラスの学生たちを対象に、世界の自然の資源について、英語で授業を行っています。国連の自然管理についても取り上げ、環境と国際問題の関係について考えます。

学生に期待すること：人間もこの地球に生まれた動物の一員です。人間と自然は区別されるものではなく、共存していくものです。人間の側にそのような意識があれば、例えば環境問題なども今より改善できるでしょう。学生にはそれを理解してほしいと思います。



ドジャリロワ・ニゴラ Nigora Djalilova (助教)
主な授業：EAP Basic、LA Social sciences、ほか
出身：ウズベキスタン
主な学歴：タシケント金融大学／東京大学大学院

授業の特色：教養科目の社会学の授業や、3、4年生対象のコミュニケーションに関する専門演習では、いずれも英語を使って授業を進めています。難しいと感じる学生もいるようですが、みんなよく勉強しています。演習では、学生とよく相談しながら授業を進めています。

学生に期待すること：ILAの学生たちには、ぜひ、新しいことにチャレンジしてほしいですね。自分が何をしたいか、ということに常に自分自身に問いかけながら、さまざまなことに積極的に取り組んでほしいと思います。



●ILAコースを志望した理由

望月: 皆さんは、どうしてILAコースを志望したのですか？



新井晴大(つくば開成高等学校)

新井: 僕は大学のウェブサイトを見て、ILAコースではすべての講義が英語で行われるということを知り、興味を持ちました。金銭面の支援があるのも魅力的でした。

高橋: 私は中学1年の時点でベトナムのインターナショナルスクールに通っており、もとも英語を学ぶ環境にいたのですが、もっと自分の英語力やコミュニケーション力を伸ばしたくて、ILAコースを志望しました。

●ILAコースの授業について

望月: 実際に4月からILAコースで学んでみて、いかがですか？

橋本: 最初は英語が多めなので不安でしたが、4月の終わりくらいから聞き取れるようになって、先生の話の6〜7割はわかるようになりました。自分で英語を使う機会がこれまでの3倍以上になって、自然と英語が出てくるようになりました。



内海保乃花(東洋大学附属牛久高等学校)

内海: ILAの先生は、日本人の英語の先生と授業のアプローチが全然違うので、とても新鮮に感じます。ただ情報を与えるだけでなく、「これについてどう思う?」というようにいろいろと考えさせてくれるのがいいですね。

野田: ILAコースの学生は現在5人ですが、授業などを通じてILAコース以外の学生とも交流があるので、楽しいです。

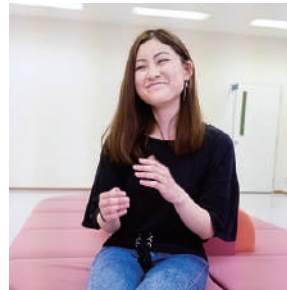
●海外留学制度について

望月: ILAコースには海外留学制度があります。留学について、どう思いますか？

21C Educational Forum ILAコース学生インタビュー

あなたはここで何を学ぶ？ (聞き手: 望月 義人 学長)

2021年4月にスタートしたILAコースでは、現在5名の学生が学んでいます。ILAコースに対する学生たちの思いを聞いてみました。



野田さゆり(石下紫峰高等学校)

野田: 留学は、ぜひしてみたいですね。イギリスとかアメリカとか、英語圏に留学して、その国での生活を体験してみたいです。

内海: 留学制度は、私がここに入学した理由の1つです。大学から補助金が出るということも、勇気づけられます。英語圏への留学はもちろんですが、台湾の大学にも興味があります。

●卒業後の進路について

望月: 大学卒業後の進路について、どのように考えていますか？



橋本峻佑(大子清流高等学校)

橋本: 僕は地方公務員になりたいです。今は地方も観光などに力をいれているので、英語力があれば、活躍の舞台は広がると考えています。

野田: まだ具体的には決めていませんが、絵を描くことと英語が好きなので、その両方と関係のある仕事に就ければいいなと思っています。

新井: 僕は英語も好きですが、情報系の分野にも興味があります。将来は情報系の仕事に就きたいですね。そのために、大学院進学も視野に入れています。

●これからILAコースを目指す皆さんへ

望月: 高校生の皆さんに向けて一言、お願いします。



高橋芽子(鹿島学園高等学校)

高橋: ILAコースは学生たちの個性を大事にしてくれていると思います。個性を自由に表現できるのがいいです。

内海: 極端にハイレベルな英語がないと入学できない、というわけではありません。自分の意見が伝えられるくらいの英語力があるなら、進学先として考えてみてもいいのではないのでしょうか。

授業研究会報告

本学では学内でアクティブラーニングなど新たな教育手法を共有するという観点から、全専任教員を対象とした授業研究会を2021年4月から実施しています。4月29日の第1回研究会では百武助教と小田桐助教が、6月3日の第2回研究会では江原教授と高嶋教授が、授業を充実させるための自身の工夫について、それぞれ報告しました。

01 百武 仁志 助教 授業への工夫

百武助教が前任校で行っていたアクティブラーニングの紹介をしました。座学に飽きた学生のモチベーションを高めるために学生自身に目標を設定させたり外部ソースの活用方法を学習させたりしたことを紹介した後、学習効果を高めるために行った「大学生観光まちづくりコンテスト」を活用したフィールドワークの手法や、地域を紹介する動画の作成方法、企画書の作成方法、プレゼンテーションの方法について報告しました。

02 小田桐 ジェイク 助教 日本近代文学と出版

小田桐助教が授業で実際に行っているグループワークの模擬体験を行いました。日本近代文学における書物の装幀デザインと作品・作家との関係について考えるために、小田桐助教が準備した文庫本の中から1冊を選び、その文庫本のカバーに描かれている絵から想像できるストーリーについて、教員がグループごとに討議した後、発表しました。

03 江原 一浩 教授 私の流儀 37年の集大成&生涯学習者

江原教授はこれまでの研究と実践を踏まえ、クラスルームマネジメント、教育理念、教授理論、授業展開について、①「環境は人を創る」②「教わったように教えるな」③「言語学習は習うより慣れる」④「授業は板書計画に始まり板書計画に終わる」という4つの柱を軸に紹介しました。そして、教師は授業を通して学習者の知識や技能に化学変化を促す触媒の働きを果たすと同時に、彼らと共に常に変化し続ける必要がある、との持論を展開しました。

04 高嶋 啓 教授 メディアデザイン演習-アクティブラーニングの取り組み-

高嶋教授は、つくばエクスプレスつくば駅に隣接する駐車場のリニューアルや、フラワーアートイベント、茨城県産農産物を海外に輸出する企業のブランディングなど、これまで本学メディアデザイン系の学生を対象に行ってきたさまざまなアクティブラーニングの取り組みについて紹介しました。そして、「知る・観ること」、「創ること」、「観せること」、「評価されること」を繰り返すことで、単に技術を身に付けさせるだけではなく、能動的にクリエイティブな表現力を向上させることが可能になる、と訴えました。



小田桐助教の授業を体験する教員たち



速報 NHKラジオ英会話講師

大西 泰斗 先生 特別講演会 『話せる英語をどう学ぶのか』

筑波学院大学は6月24日、ILAセンターの開設を記念し、NHKラジオ英会話講師の大西泰斗・東洋学園大学教授による特別講演「話せる英語をどう学ぶのか」を開催しました。

当日はコロナ感染防止対策のため来場者数に制限を設ける中、高校教員の先生方々や高校生、大学生を中心に、約120名が参加しました。また、オンラインによる同時中継も行い、つくば秀英高校などをはじめ四国や近畿圏を含む全国各地から約130名に参加いただきました。

ホワイトボードを使い、身振り手振りを使いながら巧みな話術で聴衆に語り掛ける大西先生の熱演講義に、来場した方々は時折うなずきながら、熱心に聴き入っていました。

「話すことができなかったら勝負にならない」「英語を使わないことは、自分の世界に壁を作ること。あなたの人生はそれで満足か?」と大西講師は、一つひとつ聴衆に語りかけました。

この講演会の詳細は、本誌第3号で改めてご紹介する予定です。

